

フェローシップ・ニュース NO. 21

2007年1月28日(日) 日本刑法学会関西部会報告

事務局長 尾田真言

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2007年3月1日

2007年1月28日(日)京都市内にある京大会館において、日本刑法学会関西部会冬季例会が開催され、13時～17時に共同研究「薬物依存症者に対する処遇とその効果測定」と題して、ドラッグ・コートについての共同研究の成果を、報告して来ました。日本刑法学会では初めての報告となります。アパリからは、石塚、尾田、嶋根の3名が報告を担当しています。

【第1セッション】

「ドラッグ・コートにおける処遇とその効果測定～米国の経験から何を学ぶか?～」

(1)「米国におけるドラッグ・コートの現状」 尾田真言事務局長

薬物をめぐる諸問題を薬物乱用、依存、中毒の3つに分類すると、ドラッグ・コートは薬物依存症の治療を裁判手続を通じて義務付ける手続ということになる。そこでは裁判官が参加者の薬物依存症回復プログラムの進捗状況を常時把握しており、即座に褒章(reward)や刑罰ではない罰則(sanction)を用いて、薬物をやめ続けるための動機付けを行う。違法薬物の使用行為があった場合でも、ただちに訴追されないような制度となっていることを、ニューヨーク州のブルックリン・トリートメント・コートの罰則一覧表を用いて説明した。なぜなら薬物依存症という病気の特徴がすべてのドラッグ・コート関係者に理解されており、再発(relapse)は回復への一過程ということが周知徹底されているからである。1989年に最初のドラッグ・コートができて18年になり、アメリカ全州に増殖して、その数が1600以上となり、かつてはものめずらしい制度であったが今では全ての州で日常業務となっている。

さらに補足として第2セッションにおいて、アパリの司法プログラム、すなわち、保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラムや、受刑中の通信教育と身元引受、出所出迎とその時点からのリハビリ施設へのスムーズな入寮について紹介し、現行法の下でもここまでは実施可能であることを示した。

(2)「薬物依存症者の処遇における効果測定の科学性」 嶋根卓也研究員(順天堂大学/国立精神・神経センター)

ドラッグ・コートに治療的効果があるかどうかについて、メタ・アナリシスという統計的手法を用いて、アメリカで1993～2003年の間に行われた24の評価研究を分析した研究(Doris Layton Mackenzie, "Reducing the Criminal Activities of Offenders and Delinquents"; New York; Cambridge University Press; 2006)を紹介し、ドラッグ・コート・プログラムには再犯予防効果があるということが検証されていることを示した。

(3)「薬物需要削減のための∞型連携理論とドラッグ・コート」 平井慎二(下総精神医療センター)

各機関が各々自己の職責を全うしつつ、互いに連携しあうことによって、薬物に対する需要の削減が最大限に図られるとする無限大型連携理論についての説明がなされた。また、閉鎖環境においては、生理食塩水の注射を用いて、大脳生理学的依存をとくことが可能であることなどが紹介された。

(4)「問題解決型裁判所と治療的法学」 森村たまき(国土館大学)

治療的法学(Therapeutic Jurisprudence)の理念がいわば跡付けの形でドラッグ・コート制度を正当化してきたことを紹介すると共に、ドラッグ・コート制度が問題解決裁判所(Problem Solving Courts)として次のような裁判所の類型に発展してきたことが紹介された。

※問題解決型裁判所の種類

成人ドラッグ・コート(Adult Drug Court)、少年ドラッグ・コート(Juvenile Drug Court)、キャンパス・ドラッグ・コート(Campus Drug Court)、再社会化ドラッグ・コート(Reentry Drug Court)、家庭治療裁判所(Family Dependency Treatment Court)、コミュニティー・コート(Community Court)、ドメスティック・ヴァイオレンス・コート(Domestic Violence Court)、DWIコート(Driving While Impaired)、ギャンブリング・コート(Gambling Court)、ガン・コート(Gun Court)、精神衛生裁判所(Mental Health Court)、ティーン・コート(Teen Court)、トライバル・ヒーリング・トゥー・ウェルネス・コート(Tribal Healing to Wellness Court)、怠学裁判所(Truancy Court)

【第2セッション】

「ドラッグ・コート導入の可能性～日本への導入は可能か?～」

(5)「日本版ドラッグ・コートのシミュレーション」 石塚伸一副理事長(龍谷大学)

現在のように初犯者は懲役1年6月・執行猶予3年とすることで野放ししつつも、執行猶予期間内に再犯で起訴された場合には、結局は懲役2年実刑が付け加わって、3～4年の刑務所生活をするようになる現在の刑事司法制度は、治療システムを導入するドラッグ・コート手続よりもコストが甚大であり、しかも再犯防止効果に乏しいということが、具体的なコスト計算をとったシミュレーションの形で示された。

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所(Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次:

日本刑法学会報告 尾田真言	1
ノウハウからの報告 小田晶彦	2 ・ 3
アパリの内外報告、 研修勉強会報告 ボランティア体験談・・・ 佐々木広大	4 ・ 5
体験談・・・RYUDO、 リョウベイ 新会員募集のお知らせ	6 ・ 7
アパリからの お知らせ	8

質疑応答では、ドラッグ・コートやダルクのプログラムの具体的内容についての質問が多く、法律系の学会では薬物依存症問題になじみが薄いことがわかった。

ドラッグ・コート制度は過度のパターナリズム(家父長的干渉)ではないのかとの批判もなされたが、薬物依存症には病識がないことが多く、自らの問題性を否認する人が多いことから、強制力を用いて治療を強制しないと回復に向かうことができないと返答した。

また、龍谷大学の金助教授からは、ドイツのライン＝ヴェストファーレン州にはドラッグ・コート類似の制度があり、麻薬依存が原因で犯罪を犯した場合に2年以下の自由刑を科す場合には、裁判により刑罰の執行を猶予して治療施設へ入院できる制度があり、刑期の3分の2まで治療を受けられ、無事に治療を終えた場合は、残刑期間は保護観察になる制度があるとのことである。

以上

「Go! Go! サンフランシスコ」

独立行政法人国立病院機構下総精神医療センター
精神科医長 小田 晶彦

サンフランシスコに留学している小田晶彦先生にお願いし、現地での依存症治療の最新事情や、サンフランシスコでの暮らしぶりをレポートしていただきました。

こんにちは。わたしは昨年7月まで独立行政法人国立病院機構下総精神医療センターで精神科医として勤務していた小田と申します。下総では、おもに覚せい剤や有機溶剤、大麻などの薬物の依存とそれに関する精神障害の治療に携わってきました。かれこれ8年この仕事をしましたが、昨年の8月からアメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ市に滞在しています。UCSF（カリフォルニア大学サンフランシスコ校）の精神科に留学中です。精神科のサービスの一環として中枢刺激薬（覚せい剤、コカインなど）の依存症者のための外来グループ・セラピーをやっており、おもにそこで勉強しています。

サンフランシスコは世界的に有名な観光地ですが、じつはそれほど大きい街ではありません。人口が70万足らずですから、日本の都市でいったらどこと同じくらいでしょう？アメリカの中でも特に多民族的な街で、中南米やアジア系の移民が非常に多く、ダウンタウンに行くと、まさに人種の博覧会で大変活気があります。食事は世界各国の料理が食べられます。ちなみにおいしいものはメキシコ料理です。日本ではタコスしか知らなくて、特に興味もなかったのですが、こちらでブリットというものを食べたのが本当においしくて、すっかり病みつきになりました。トウモロコシの粉で作った皮で、ライス、豆、好みの肉、トマト、チーズにサルサソースやアボカドでつくったソースをかけたものを巻いたものです。またベトナム料理、インド料理のタンドリ、地中海料理などもお勧めです。海外で楽しく過ごせるかどうかはその食事があうかどうかにかかってくると思いますが、その点については選択肢の多いサンフランシスコは問題ないでしょう。

政治的には非常にリベラルな土地です。民主党員が多いためか、現在のブッシュ政権には批判的な人が多く、イラク戦争にたいしても当初から反対の立場の人が多かったようです。またヒッピー・ムーブメントの発祥地だったことも関係しているかもしれませんが、ドラッグに関する政策や同性愛・性転換などについてもかなり寛容です。がんやエイズなどの病気で医師からメディカル・マリファナカードを処方してもらった者は医療大麻を購入することができます。またカストロというゲイの聖地のようなところがあり、その一帯は虹色のきれいな旗があちこちにかかっていますが、ゲイのカップルが自由を謳歌しているようすが見られます。

わたしは一応大学の留学生ですが、郊外にあるキャンパスにいてもクライアントは集まらないので、ダウンタウンに近い地域でカウンセリングをしているところに通っています。ここから3本ほど通りをへだててミッションというヒスパニックが多く住む地域があります。メキシコ料理のレストランが多く、スペイン語が飛び交っているので、中南米に来ているような気分になります。ここでは夜になるとドラッグの売買が行われることもあるそうです。そしてさらに何本か通りをへだててカストロがあります。実はアメリカでは覚せい剤はゲイに人気があるのです。というわけで薬物乱用者が比較的多く集まる場所になっています。カウンセリングをしている場所は3階建てのビルの2階で、特に看板などは出していないので、外からは中でのことをしているのかわからないでしょう。入り口は鍵が掛かっている、インターホンで名前を告げると中に入れてもらえるようになっています。クライアントはだいたい30人くらいです。平均年齢は40歳前後で、場所柄白人のゲイの男性が多いです。けっこう高学歴で社会的な地位の高い人もいます。また幻覚妄想が取れない精神病症状の重い人やHIV陽性の人も来ています。一方スタッフのほうは精神科医が1人。彼は非常勤で週に1回しか来ません。また臨床薬理学士（Clinical Pharmacist）といって薬学部を卒業し、その後精神科の訓練を受けて資格を取り、なんと患者さんを面接し、処方ができるという人がいます。ちなみにアメリカにはナース・プラクティショナーといって、処方ができる看護師もいます。びっくりですね。あとはカウンセラーが3人ほど、研究者も10人ほどでやっています。



メキシコ料理。ブリットではありませんが……。

プログラムの内容は、1時間半のグループセラピーが週5回、ステップアップすると週2回、他にカウンセラーとの個別カウンセリングが週1回、処方が必要なクライアントには随時精神科医か臨床薬理学士との面接があります。グループセラピーはカウンセラーによって運営されています。一通り自己紹介を終えた後、クライアントが人間関係上の悩みや社会での疎外感などを話しはじめ、それに他のメンバーがアドバイスをするという形式です。クライアントはとても敏感で、また対人関係の処理が苦手な者が多いので、ささいなことでフラストレーションがたまり、それが引き金（トリガー）となって薬物の再使用に向かいます。ここでカウンセラーが引き金というテーマを取り上げ、専門的な立場で助言を与えるというようなことが行われます。中には幼少時に虐待を受けた体験やパートナーとの死別などの喪失体験を乗り越えられない者もあり、本当に少しずつですが、誰にも話ができなかった体験をグループの中で話すようになってから回復に向かう者もいます。ここで回復と書いたのは、生きる力や自尊心の回復、感情の安定などといったことで、断薬をゴールにするかどうかは本人次第です。ただ結果的に薬物の使用は減り、そのまま断薬に向かう者もいます。とくにハイパーパワーについて語られるわけではありませんが、私自身はこのグループに参加していてスピリチュアルなものを感じる事が多々あります。先日も50歳代後半のクライアントが「わたしは長い間幸せになる資格があるとは思えなかった。あまりにもたくさんのものを破壊してきた」と深い悔恨をこめて語り、他のクライアントが静かに耳を傾けている姿を見たとき、とても敬虔な気分になりました。日本ではスピリチュアルという言葉になじみがないせいか、なにか特殊なもののように考えられがちですが、人が心を開いて真情を吐露し、そこに真剣に向き合う人がいれば、そこからスピリチュアルなものが生まれてくると思います。逆にスピリチュアルなものまでマニュアルやプログラムで手に入れようとするのは不自然に思えます。

このような治療法はニューヨーク、サンフランシスコ、シアトルなどの地域から徐々に広まってきています。その背景にはAA、NAや治療共同体などの完全な禁欲を求める従来の治療法ではかなりの人が途中で脱落し、その中には治療を受けられないまま社会から疎外され、薬物の使用や危険な性行動を続けたため、HIVの感染にいたった者が多かったという事情があります。なぜ多くの脱落者が出たのでしょうか？従来は、薬物依存症者は薬物の使用に関して完全にコントロールを失っているため、自分が無力であることを認められなければ治療が始まらないと考えられていました。ただ最初からそれを受け入れられる人は非常に少なかったようです。また一部の治療共同体では、ルール違反に対し屈辱的な懲罰を与えたり、なかなか正直に話ができない入寮者を囲んで集団で罵倒するアタックセラピーといった厳しい治療が行われていたことも、多くの脱落者を出した原因かもしれません。ハームリダクションは、日本では薬物乱用者の針を清潔な針と交換するといったエイズ予防対策というイメージがありますが、治療をあきらめているわけではありません。薬物依存症者は過去の虐待体験や抑うつなどの精神症状から逃れるための自己治療として薬物を使っているという考え方に基つき、まず背景となる精神症状に焦点をあて、カウンセリング、薬物療法、グループセラピーなどで回復に向かわせることで危険な薬物の使用を減らすことを目指します。

ただコカインやヘロインなどくらべて精神病を誘発させやすい覚せい剤の患者に対して悠長な治療をしていると、本人に十分な治療意欲が生まれる前に慢性の精神病になってしまう恐れもあります。実際このクライアントはみな治療意欲が高いのですが、平均40歳前後で、この年になってようやく治療する気になったという感じです。ただ現在流行のマトリックス・プログラムでも、まず安定した治療関係をつくり、長く治療を継続することを重視するというようにハームリダクション的な考え方が用いられています。否認を打破することに焦点を置いた従来の治療が大きな転換期に差し掛かっているように思われます。

ちなみにこのクライアントはほとんどが自発的に通っており、週5回のグループがかれらの生活の大きな支えになっているようです。ドラッグコートから紹介されてくる者もありますが、通っているうちにグループが気に入ってドラッグコートが終了してからも継続して通ってくる者もいます。今後このハームリダクションという考え方がどれだけアメリカの中で受け入れられていくのでしょうか？

昨年の中選挙で保守的な共和党が大敗し、よりリベラルな民主党が勢力を伸ばしてきたことが影響してくるかもしれません。しばらくは動向を見守りながら、機会があればまた報告したいと思います。

お楽しみに。



職場の同僚とともに。左端が筆者。



サンフランシスコの地下鉄で



フィッシャーマンズワーフに停泊していた潜水艦の前で

アパリプロジェクトの進捗状況の報告

1、薬物使用者向けのHIV感染予防パンフレット

(コトー)

アパリでは三菱財団の助成金を受け、薬物使用者を対象にしたHIV感染予防のパンフレットを2種類作成しています。一つは注射薬物使用者を対象に、薬物注射と関係が深い感染症であるHIV/AIDSとC型肝炎について、もう一方は、薬物をキメてセックスする際に関係が深いさまざまな感染症について、その感染経路、予防、検査、治療などについてまとめたものとなる予定です。医師、保健師、NGO、アパリクリニック、日本ダルクのボランティアなどの協力を得て、当事者の視点に立ったわかりやすいパンフレットを目指しています。今年の夏頃に完成予定です。

<ハームリダクションについての論文掲載>

アパリ研究員の古藤吾郎と嶋根卓也などが共同執筆している論文「ハームリダクションと注射薬物使用：HIV/AIDSの時代に」が「国際保健医療」第21号に掲載されました。ハームリダクション（Harm Reduction）と聞くと、一般的には注射器交換やメサドン代替療法の2つだけが取り上げられがちですが、それら以外にも薬物使用者の健康被害に注目したさまざまなアプローチがこの論文で紹介されています。アパリでは現在の日本で展開可能なプログラムの実施を目指しています。この論文はアパリのホームページのリンク、あるいは日本国際保健医療学会のWebサイト<http://jaih.jp/>にてダウンロードできます。

2、JICA（国際協力機構）との協働による「フィリピンの薬物依存症者の支援」（志立）

JICAに対して国際協力活動の提案書を出してから、約2年以上経過しました。当初はフィリピンのミンダナオ島の地域を支援するという計画でこの事業を進めてまいりましたが、ここに来て新たな展開がありました。JICAからその対象地域は大変危険であるとのことから、支援の対象地域をもう少し安全なところに移して欲しいというものでした。ほぼ提案書も固まってきた時期での変更は大変辛いものがあります。また、現地のカウンターパートの人たちと良い関係を築いてきただけに、とても残念に思います。今後は、支援地域をマニラで検討していく予定です。これからカウンターパートの選定やネットワーク作りなど、課題はたくさんありますが、一歩ずつ前に進んでいきたいと思っています。春頃には現地調査を考えています。プロジェクト開始までしばらくお待ちください。

研修・勉強会の報告

1、法務省研修会「リスク社会における刑事政策の新たな潮流」

(尾田)

平成19年2月2日(金) 14:30-18:10に、法務省大会議室において、国連アジア極東犯罪防止研修所他の主催による「リスク社会における刑事政策の新たな潮流」というテーマの刑事政策公開講演会が開催され、アパリから尾田、志立、古藤が聴講しました。以下、薬物依存症者対策に関わる部分を紹介します。

【第1部】ピーター・ホイールハウス氏（英国内務省薬物介入プログラム及び頻回犯罪者プログラム部長）の講演

- ①再犯率を減少させるためには頻回犯罪者にターゲットを絞って集中的に監視する。
- ②イギリスには18万人の薬物犯罪者がいるが、処遇プログラムがあっても自発的には行かない人が多かった。そこで保釈の条件としてプログラムの受講を義務付ける制度を創設したという。

【第2部】ブライアン・グラント氏（カナダ連邦矯正局嗜癖研究センター所長）の講演

- ①アメリカが厳罰化のせいで刑務所人口が増大した一方で、カナダでは刑務所の代わりに処遇プログラムを導入したことで刑務所人口が減少したことを紹介し、犯罪者は犯罪実行中に法定刑のことなど考えないのだから厳罰化に意味はないと指摘していました。
- ②頻回受刑者はアルコールや薬物の乱用者であることが多いので、矯正施設は物質乱用対策に取り組みなければいけない。

質疑のほとんどは出席していた日本の検察官たちからなされていました。この時期に法務省関連機関の講演会で薬物回復プログラムが開催されたのは、法務省が政府レベルで薬物乱用者治療プログラムの導入を積極的に考えるようになってきたからではないかと推察します。少しでも多くの予算が薬物乱用者に対する治療プログラムに投入されることを期待します。

**ロイ神父からのメッセージ
DVD付き書籍
販売中！**

『仲間になってくれて
ありがとう』

昨年他界したロイ神父が20年以上にわたりマック・ダルクを通して語ってくれた数々の貴重なメッセージと、彼の“仲間”からの手紙を綴った珠玉の一冊。日本における依存症リハビリ施設の歴史を知り、回復者たちの生の声を聞くことができる総数500ページを超える重厚な内容に加えて、ロイ神父のビデオメッセージが収録されたDVD付き。援助職の方、ご家族、当事者などさまざまな立場の方にとって必読のバイブル書です。一般の書店ではご購入できません。

定価 3,500円

FAX : 03-5830-1791

メール: info@apar.i.jp

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

2、ワンデーポートとの協同事業「軽度発達障害と依存症」勉強会 (志立)

2月6日(火)赤羽会館において、ワンデーポートとの協働による勉強会が開催されました。講師は埼玉県立精神医療センターで主に子どもの発達障害を専門としている朝倉新先生でした。更に依存症の病棟にも数年勤務した経験を持っています。各依存症リハビリ施設のスタッフ、医療従事者、福祉関係者、法務省の職員など約50名が参加され、熱心に質問されていました。発達障害と依存症の両分野について臨床経験のある医師はほとんどいないというのが現状のようです。具体的な支援策も含めて、これから勉強会を重ねていく必要があると感じました。



軽度発達障害の勉強会の様子

3、JICA・PCM参加型計画手法を用いた事業提案の研修 (古澤)

JICAのPCM参加型計画手法を用いた事業提案書の作成方法に関する研修に参加しました。平成19年2月24日(土)、25日(日)に渋谷区幡ヶ谷にあるJICA東京国際センターにて行われ、嶋根研究員と私の2名で参加しました。現在申請中のフィリピンの薬物依存症者に対する社会復帰支援事業に関わっているため、参考になればと思い参加したものです。約20名の様々な団体の方が参加されました。研修は、事例を下にグループ分けされ、プロジェクトの計画立案・実施のための手法をワークショップにより作業するスタイルです。通常4日かける内容を2日で研修するので、休憩は毎回5分で、かなり内容の濃いものでした。具体的には、パンサラ村への野菜栽培の普及、振興という事業提案書の完成でした。勿論架空のもですが、野菜の料理の普及のために、長野県から野菜研究家を派遣し、野菜を好きになってもらうなどの計画です。

この研修を終えて、現地の様々な情報ソースの必要性や3年という期間内での成果を出す難しさを実感できました。



JICA東京国際センターでの研修風景

『アパリでの2年間を通じて考える』

ボランティア・スタッフ 佐々木 広大
(中央大学法学部法律学科)

ある人にとって至極常識であることはもう一人にとって常識ではない、逆もまた然り。そういった現象は日常茶飯事で、今更特筆すべきことではないと思います。しかし、人生で何度かはコペルニクス的回転というものに出くわす事もあるもので私の場合、そのうちの1回はアパリとの出会いでした。ここでは覚せい剤を使うこと、濫用することは罪ではないようです。正確に言うと悪いことではあっても決して罰を受ける、というものではないのです。20年ばかりの人生ではありますが、覚せい剤や大麻を使うことは悪いことだ、使った奴は罰を受けるべきだ、とただ一方的に教えられてきて疑いもしなかった私にとってそれは衝撃的でした。同時に、初めて見せていただいたミーティングも、それは衝撃でした。人前でこれほど自分が覚せい剤を使ってきたことを包み隠さず語っている姿を私は見た事がありませんでした。その時、私にもなにか回復に役立つことは出来ないだろうか？日本でのドラッグコート実現のため何か出来ないだろうか？と思い学生ボランティアとしてアパリにお世話になることを決心しました。

約2年間のアパリでの仕事の中で最も強く印象に残っているのは拘禁中のクライアントとの面会等です。大体いつも直前に言われることが多く少々面食らうこともありますが、普段裏方の仕事がほとんどでクライアントと接することがあまりなく、本当に役立っているのかどうか分からなくなる事はしばしばあります。でも、面会等をした時は自分も少しはアパリの業務に、依存からの回復に役に立っているという実感を掴むことができ、改めてアパリでの業務にも身が入ります。それに、後々人づてにでもお礼を言っただけだとやはり嬉しいものです。

また、一緒に仕事をしているスタッフに忘年会やスキー旅行に連れていってもらおう等公私共に仲良くしていただき、人生の後輩として色々な勉強もさせてもらいました。

私は今年の3月でアパリを辞めますがここで学んできた普通の学生では決して学べないような事、薬物依存症というものがあり、それに苦しんでいる人が大勢いるということや、依存症から回復するために多くの人が動き、支援しているということ等、また、アパリの仕事で身につけた法律をはじめとする知識や経験を決して忘れずにこれからの自分の生きていく上での糧としていきたいと思えます。

アパリができてもうすぐ8年目に入ろうとしています、世間でも徐々に認知されつつあり、アパリが活躍できるフィールドはこれから一層増えると思えます。遠くからではありませんがこれからの更なる発展を祈り、また皆様の回復のため微力ながらなんらかの形で役に立てたらな、と強く思います。

尾田事務局長から：

佐々木君は中央大学の藤本ゼミ(犯罪学)の20年後輩にあたります。ゼミの社会見学でアパリに見学に来てから、ボランティアとして働くようになりました。

今春から、某大手医療機器メーカーに就職が決まりました。就職活動中もアパリでの活動を一生懸命頑張ってくれました。

就職おめでとうございました。そしてお疲れ様でした。

アパリでは次のボランティア・スタッフを募集中です。できれば法学部の学生に来ていただくと助かります。

アウェイクニングハウスを退寮した方からのメッセージ

「藤岡での生活を振り返って」

RYUDO 40代

私がアパリ藤岡（現・日本ダルク アウェイクニングハウス）での生活を送ったのは平成17年7月から平成18年8月末迄です。

では、何故、藤岡での入寮生活を送らなければならない羽目になったのかの顛末をこれから少し書きたいと思いますので暫くお付き合い下さい。

私が薬物を使い始めたきっかけは、13歳のときにシンナーを吸って、それが約6年間位続き、19か20才位から酒に走り、最初はウィスキーを飲み、それが段々と派手な生活になり、23年の間にブランデーをクラブで飲むという暴挙に出て、その当時では私の年令では給料を多く貰っているほうだったのですが、クラブで一晩に300万円を使うとう生活が長く続く訳がありません。

そして、22才の時に実家を飛び出し、千葉県の銚子にあるパチンコ屋で働き、そのパチンコ屋が潰れ、少しブラブラしていた時にお客さんとして店にきていたヤクザ者に「遊んでいるなら本格的に遊んでみたらどうだ！」と言われ、私も考える事なく「じゃあお願いします。」と返事をし、晴れてその日からヤクザデビューとなりました。ヤクザを13年間続けたわけですが、組の事務局長という役職を貰いシャブ（覚せい剤）で破門になり、神戸所払い（神戸から出て行け、そして二度と神戸に来るな）になり、逃げるように関東に帰ってきたわけです。

何故、シャブを使ったかという、いたって単純な動機“やせられる”という甘い言葉につい騙され、はじめのうちは週に一回程度だったのが、最後には一日5gを使うという生活が続き、その時本命の彼女が居たのですが「あんたがシャブを止めたら結婚する」といつてくれたのですが、そのクスリが止まらず結婚は勿論の事、その当時のヤクザとしてシノギ（稼ぎ）を全く失いました。ヤクザという非合法集団からも「お前はいらないっ！」と言われ、今こうして原稿を書いている、つくづく駄目なんだな、と思い知らされます。

そして、関東に帰って来て、おとなしくしていればいいものを懲りもせず、シャブを使い続け、警察に逮捕され、ヤクザ時代の執行猶予と合わせて2年6月という刑を府中刑務所で受け、仮釈放を三ヶ月貰い、娑婆に出たのですが、またまた懲りずに、出た次の日にシャブを使い、私のシャブ人生で初めてブラック・アウトを起こし、クスリを身体に入れた時の事は憶えているのですが、その後の事は何も分からず、気がついたら病院のベッドの上で、約2週間意識不明、脳挫傷というケガをしてしまったのです。そして、入院期間約3ヶ月で、そろそろ退院という所までいっておきながら、警察が逮捕しに来て、今度は群馬の前橋刑務所で1年8ヶ月、受刑生活を送る事になりました。前橋では仮釈を貰える事無く、府中では印刷の工場だったのですが、前橋は座り仕事で、毎日が退屈な生活でした。

そして、行くあてもなく「どうしようか？」と思索していたところ、薬物依存者の回復施設があるという事を、前の入院生活で知り、頼ってみようと思い、最初は埼玉の施設を訪ねたのですが、その当時は埼玉の施設では入寮施設が無いので、埼玉の施設長が考えてくれて、「君は足が悪いし、刑務所出て来たばかりだから、アパリ藤岡はどうだ？」と言われ、私は「刑務所も群馬、施設も群馬は何だかいやですネ！」と言ったところ、施設長は「ついでに群馬で嫁さん見つけたらいいがな」と言われました（笑）。

そして、藤岡での生活が始まったわけです。行ったその日に感じた印象は「なんて山の中なんだろう。」と思い、藤岡の施設長は「穏やかそうな人だな」と思いました。施設の中では、ミーティング、食事当番、ゴミ当番があり、スタッフと一緒に仲間の食事を作り、後片付けをし、夜のNAへ行くという生活が続きました。そんな単調な生活の中にも、しっかりプログラムがあり、ステップがあり、頭の悪い俺でも、人より時間は掛かったけれど、自分なりにそれらのものを理解したと思います。

あの藤岡での1年2ヶ月があったから、今の私があるといっても過言ではありません。そして、今は生まれた故郷、東京に帰って来て、上野にあるアパリクリニックのデイケアに通い、夜はNAという生活が続いています。東京に帰って来た当初、東京でのデイケア、夜のNAが分からず困っていたところ、中学時代からの仲間がサポートしてくれて、大変助かりました。その彼とは藤岡で再会し、不思議な縁だなと感じ、又、感謝しています。

そして、今私は身体障害者四級の認定を受け、生活保護で国や都や区にお世話になっていますが、その恩に報いる為に（勿論アパリにもです！）今の私に何か出来ることはないかと考え、この春から身障者の職業訓練校に通う事が決まりました。何だか40才で学生というのも

**アパリ発行
「Born・Again（ボーン・アゲイン）」
体験談 販売中！**

2005年5月に第2版が発売になりました。

体験談が13人分収められています。

アパリではこの本を拘置所や刑務所にいる人の差し入れ用として使っています。

1冊 1,500円
(会員価格:1,000円)

お申込はメールかファックスで
FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp
ご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

照れくさいですが・・・

その様な訳で、今の私は“ハイパーパワー”の尊さのもと、順調に物事が運んでいます。私の様な大ポン中が、気づけたのですから、どうぞみなさんも“焦らず”“挫けず”“負けない心”を持って、回復して行って下さい。それでは、覚せい剤でブツ壊れた頭の私の文章を読んで頂いて、感謝しております。ありがとうございました！

ブラボーAPARI!!!

「アパリ藤岡を退寮して」

リョウベエ 30代

僕は、2001年11月14日に、アパリ藤岡研究センター（現・日本ダルク アウェイクニングハウス）に入寮しました。施設に入るきっかけは親の薦め、医者薦め、福祉の薦めで自分の意思ではありませんでした。

入った頃は、毎日使いたかったです。施設を出たら使おうと思って過ごしていました。施設暮らしは、退屈でしたが、施設に入って1年位の間、名古屋、仙台、沖縄に行かしてもらいましたが、そういった場所では、お酒が止まりませんでした。開放気分になりアルコールを飲んでいたのでした。

隠れて飲んでいて、施設を早く出たいということもあり、スタッフや仲間にアルコールを飲んでしまったとは言えませんでした。結局、偽りのクリーンで藤岡を去り、東京の日本ダルクに施設移動しました。偽りのクリーンが嫌になり、ダルクのスタッフに相談しました。

そこで初めてクスリとアルコールを施設にいる間だけでも止める気になりました。それから施設、自助グループ、仲間、ハイパーパワーの力により薬物使用が止まり始めました。クリーン3年頃までは外に出たら使おうとたくらんでいましたが、最近では“もう薬物使わなくてもいいじゃん”って感じです。その間には、しらふでの精神病院の入院もありましたが、今はそれも必要だったのだと思っています。話は戻りますが、藤岡での生活もいい体験になっています。それと僕はダルクを出たらまた使ってしまうと思うので、ダルクに残り施設の手伝いをしていこうと思っています。

今は、仲間に処方と生活費を渡す事と、ミーティングの司会をすることが手伝いの内容です。何をやっても物事が続かない性格なので、手伝いは、長続きすると良いと思っています。これからもダルクに残り、回復してゆけばと思っています。

ありがとうございました。

アパリ 新会員募集中！！

平成19年4月より新規会員（正会員・賛助会員）を募集いたします。ご入会していただいた方には、会報「フェローシップ・ニュース」を毎号お送りします。また、書籍購入の割引や公開講座・フォーラム、自助グループ開催に関する情報提供等、様々な特典がございます。正会員になられた方の特典は、年に一度開催される総会に参加し、意見を述べる事ができます。

アパリは立ち上げて8年目に入った組織です。今後も、薬物関連問題の新たなシステムとネットワーク構築のために全力を尽くしていく所存です。APARIに関するご意見ご要望がございましたらいつでもご連絡ください。

【年会費】 正会員：12,000円 賛助会員：6,000円

【期 間】 平成19年4月1日～平成20年3月31日まで

●新規会員

同封の郵便振替用紙にて正会員・賛助会員のご希望の方に丸をつけ、必要事項をご記入の上、同封の郵便振替用紙にてお振込ください。領収証の発行を持って登録とさせていただきます。

●継続会員

継続の会員の方も平成19年度の会費の納入をお願いいたします。同封の郵便振替用紙にてお振込ください。

「薬物依存」 DVD販売中！

アパリが作成したDVDで本人の体験談や、近藤恒夫の話が約30分間収録されています。学校での薬物乱用防止教育、行政の職員の研修で利用されています。

1枚 3,000円

FAX : 03-5830-1791

メール: info@apari.jp

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

○アパリ東京本部

〒110-0015
東京都台東区東上野6-21-8
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
メールアドレス：info@apari.jp

○アパリ藤岡研究センター

(運営：日本ダルク アウェイクニング
ハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

- 【入寮条件】
1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
2、男性(年齢制限なし)
【入寮期間】
基本的に13ヶ月
【入寮費】
月額16万円(初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
(新しくなりました)
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成19年3月1日発行
定価 1部 100円

＜アパリの司法サポート＞

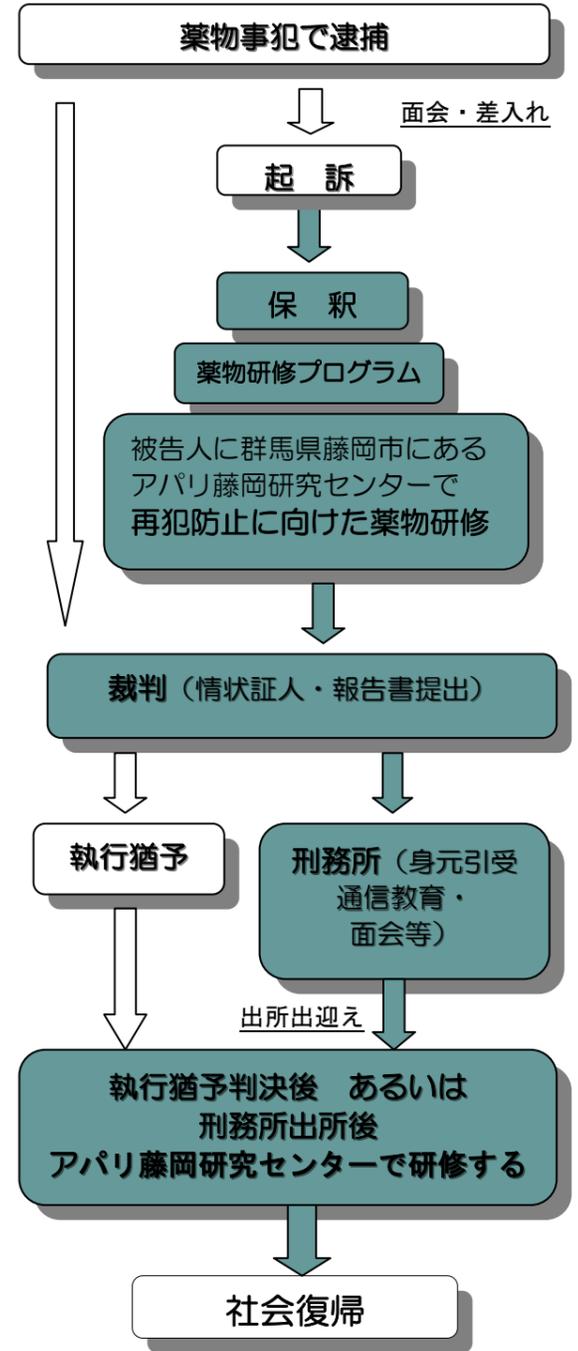
《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないうまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は5%以下です。最近では特に、受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に

出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。
[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]【お問合せは東京本部まで】

アパリでの支援



＜家族教室＞

「エクステンディッド・ファミリー・クラブ」

日付	体験談(30分)	テーマ
3月5日(月)	日本ダルク 佐々木広 川崎ダルク 岡崎重人	ステップ1、2、3
3月19日(月)	DMC 荒井宏昌 日本ダルク 篠原義裕	ステップ4、5
4月2日(月)	アパリクリニック上野 中山雅博	家族との関わりについて
4月16日(月)	日本ダルク 坪倉洋一	新しい生き方
5月7日(月)	日本ダルク アウェイクニングハウス スタッフ	どん底からの出発

対象：薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者
日時：第1・第3月曜日18:30～20:30
場所：アパリ・クリニック 上野2階
参加費：3,000円
【お問合せは東京本部まで】

＜個別相談・カウンセリング＞

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など。出張カウンセリングは相談の上、実施可能かどうか判断させていただきます。(料金は別途必要)

【費用】45分 9,000円 【場所】アパリ東京本部 501号室

【カウンセラー】町田 政明 [神奈川県立せりがや病院のケースワーカーとして活躍、ホープヒル代表、寿アルク理事]

【予約】電話でお申し込み下さい。03-5830-1790

【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。遅れていらした場合は時間が短くなりますのでご了承ください。